

## 2022年が国連国際ガラス年に正式決定！

京都大学大学院人間・環境学研究科 国際ガラス年2022日本実行委員会

田部 勢津久

### 2022 is now declared UN International Year of Glass !

**Setsubisa Tanabe**

*Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University*

*IYOG2022 Steering Committee of Japan*

去る2021年5月18日(日本時間19日未明)、米ニューヨークの国連本部で開催された国連総会第66回会議第75セッションにおいて、「2022年を国際ガラス年(International Year of Glass, IYOG)とする」議題が正式採択された。

世界的なCOVID-19パンデミックの中、また米国政権移行(共和党トランプ→民主党バイデン政権)の時期で国連代表の交替、対面会議開催の延期等、正式採決までに紆余曲折があり、当初予定よりかなり遅れ、ヤキモキさせられていた。国連採択までに多くの関係者の様々な尽力・貢献があったが、とりわけ国際ガラス委員会(ICG)のAlicia Duran会長(スペイン研究評議会教授)による筆舌に尽くせない様々な工作尽力があって、決議案の作成と計19ヶ国を共同提案国とする議案提出と正式採択に至った。筆者は2013年から2020年10月までICG運営理事(その後引き続きIYOG国際運営委員会委員)を務めていた(いる)ため、「国際ガラス年」実現に至る経緯を詳しく知る立場にあった。およそ以下に紹介してみたい。

1959年に始まる国連による国際年であるが、近年でかつ科学に関わる分野では2019年の国際周期表年(International Year of Periodic Table, IYPT)、2015年の国際光年(International Year of Light and Light-based Technologies, IYL)があり、各年において、世界中で様々な祝賀行事と啓蒙活動が進められた。

歴史上かつて新材料が文明を変革した石器、青銅器、鉄器時代になぞらえて、初めて「ガラス時代の到来」という宣言<sup>[1]</sup>を行ったのは2014年米コーニング社で、奇しくも国際光年IYL2015の前年である。翌2015年にはThe American Ceramic Society (ACerS)学会論文誌であるInternational Journal of Applied Glass Science誌(2010年創刊)において初代(創設)編集長David Pye氏の強力な主導の下、国際光年IYL2015特集号「Glass and Light」が編集出版され<sup>[2]</sup>、光科学技術の発展におけるガラス材料の重要性を再認識する企画となった。依頼されて総説を執筆寄稿した筆者自身も当時はまだ国際ガラス年というアイディア自体、想定していなかったと思う。その翌年同誌2016年の特集号「The Glass Age」が編集され、D.L. MorseとJ.W. Evensonによる「Welcome to the Glass Age」と題した巻頭論文<sup>[3]</sup>がある。この特集号ではPye氏の初代編集長としての退

〒606-8501

京都市左京区吉田二本松町

TEL 075-753-6832

FAX 075-753-2957

E-mail: tanabe.setsubisa.4v@kyoto-u.ac.jp

任前最後の編集巻頭言「ガラス時代の到来を確信」(遺言?ただしご健在である)という力強い名文も掲載されている<sup>[4]</sup>。その後2018年5月の米サンアントニオでのACerSガラス光学材料部会(GOMD)年会で、ガラス界におけるPye氏(Alfred大学名誉教授, ICG元会長, ACerS元会長)の長年の貢献を顕彰するD. Pye特別シンポジウムが開催された。その中で、ICG会長(当時)であるChoudhary氏とPye氏を中心に、国際ガラス年IYOGの実現を目指すこと、目標はドイツガラス学会100周年(結果的にIYOGマイルストーンの一つ)でもあり、3年に一度のICG大会のベルリン開催予定である2022年とすることが合意された。同年9月には横浜で開催されたICG年会のうちにChoudhary会長からIYOG実現の決意表明(Pye元会長と連名)がなされ、任期(3年)交替でちょうど会長に就任したDuran氏(現会長)に、ICG主導で運動を展開する意志が引き継がれた。その後Duran会長は「国際ガラス年2022」実現のために米国国連代表部の補佐官や様々な方面にアウトリーチ活動を精力的に展開、ACerSのみならず、ガラス芸術協会(GAS)、国際ガラス美術館協会(ICOM)、ガラス協会連合会(CGA)の支持取付けと協力確保を行った。ちょうどボストンでのICG2019大会の前後の時期である。彼女はまたACerS Bulletinの2019年9月号に「Letter to the Editor」を寄稿、IYOG実現構想を正式に紹介した<sup>[5]</sup>。この中で「2022年国際ガラス年の国連採択を実現する試みを、国際的な美術・科学ガラスをテーマにした協会や博物館に知らせ、支持を取り付けるための大規模な計画が現在進行中である」と宣言している<sup>[5]</sup>。

国際IYOGウェブサイト<sup>[6]</sup>の開設とDuran会長の号令により世界中で賛同書の集約が行われた。2020年1月時点で70カ国以上、1,000以上の団体がこの取り組みへの支持を表明、最終的には81カ国から1640の賛同書が集められた。

日本国内ではセラミックス協会ガラス部会の山崎部会長と松岡事務局長(いずれも当時)や徳田滋賀大教授のご協力により、効率的な収集の為に賛同書提出のウェブシステムとひな型を準備、全国のガラス関係機関、企業、美術館等から多くの賛同書を集め、提出することができた。

2020年秋Duran氏を委員長とし、ICG加盟各国委員から構成されるIYOG国際運営委員会が結成された(日本からは筆者と井上東大教授が委員として参画)。同じ頃、日本実行委員会も結成され、18分科会からなる種々の国内活動計画準備を始めている。

国連の正式承認を得るために国連スペイン大使の助言を受け、国際運営委員会は、関係有志の協力も得て、決議案文書作成と国連総会で行う(当初2020年11月初旬予定)プレゼンの準備がなされた。世界的パンデミックのため、まずはYoutubeによるバーチャル形式でSantos国連スペイン常任大使による序章演説から始まる約30分の提案ビデオ<sup>[6]</sup>が12月3日世界中に公開された。このプレゼンではIYOGプロジェクトの計画中の活動や開発中のコンセプト、パートナー団体や貢献人物の紹介、国連のアジェンダ2030(持続可能な発展のための目標, SDGs)との関連性、などが説明されており、ガラス材料の環境適合性、重要性を訴える説得力のある出来映えとなっている<sup>[7]</sup>。

2021年を迎えて、なおも正式決議の総会開催が何回も遅れたが、4月中にまとめた決議案につきいくつかの国連加盟国の代表と交渉がなされ、5月11日に19ヶ国による事前合議に至った。外務省を通じてお願いした甲斐があり、我が日本国も共同提案国の一つとして加わっている。NY本部での正式な国連演説は5月18日(わずか6日前に日程決定)の国連総会第66全体会議第77セッションでスペイン国代表Alonso大使によりなされ、「2022年をIYOGとする議案A/75/L84」は無事(やっ)採択された。その様子は国連HPでも実況中継された

(現在も視聴可能)<sup>[8]</sup>。日本時間翌 19 日午前 1 時頃だった。

この場を借りて IYOG 実現のための賛同書の提出集約にご協力下さった皆様に感謝申し上げますと共に、この記念すべき慶事に対する祝意を本誌「ニューガラス」の読者である皆様はもちろん、国内産官学の科学技術、工芸など国内ガラス関係者の全ての皆様と共に分かち合いたいと思う。同時に来 2022 年が、多くの方々にガラスへの認識を深め、学びまた楽しんで頂ける、実りある国際ガラス年になることを願ってやまない。

なお、2022 年には既に数え切れない数の記念行事が計画されている。紙面の関係で 3 大行事のみを挙げるとすると、2 月 10、11 日スイスジュネーブでの国際開会式では超一級の講演者陣を招待予定、7 月 3～8 日 ICG コンgress (3 年に 1 度の大会) がベルリンで開催、国際閉会式の主催は日本が担当することが正式決定されており、井上東大教授の運営により 12 月 8、9 日に東大安田講堂で開催される予定である。

国内開催イベントの計画も例外ではなく、行事、出版企画(確定分のみ)の紹介は吉田智氏(IYOG 日本実行委員会事務局長)執筆による本号掲載のコラムに譲ることとし、皆様方には是非ご参照頂きたい。

## 文献

- [1] "Welcome to the Glass Age, Presented by Corning", (2014) ; <https://www.youtube.com/watch?v=bbX9KOpDJME>
- [2] L.D. Pye, M. Affatigato, "Editor's Note", *Int. J. Appl. Glass Sci.* 6 [4], (2015) 303.
- [3] D.L. Morse, J.W. Evanston, "Welcome to the Glass Age", *Int. J. Appl. Glass Sci.* 7 [4], (2016) 409.
- [4] L.D. Pye, "Arrival of the Glass Age Affirmed", *ibid.* 7 [4], (2016) 407.
- [5] A. Duran, "Toward a United Nations Declaration of 2022 as The International Year of Glass: Greetings to all!", *Am. Ceram. Soc. Bull.* 98 [7], (2019) 3.
- [6] International Year of Glass 2022; <http://iyog2022.org>
- [7] "Worldwide presentation of the United Nations International Year of Glass 2022"; <https://www.youtube.com/watch?v=A6ZEaWvIz6k> (2020) (←オリジナル); <https://www.youtube.com/watch?v=rWNZawSJck0> (2021) (日本語字幕付き) .
- [8] "General Assembly declares 2022 International Year of Glass", *UN Audiovisual Library*, (2022) ; <https://www.unmultimedia.org/avlibrary/asset/2620/2620241/>